



井上道義の 未だだった今より

台北交響楽団客演のために、ジトジトした梅雨空の台北で書いています。

金沢とアジアは、最近、直接、絆を深めている。石川県が若手育成のため14年前から開いている真夏の音楽集中講習会・いしかわミュージックアカデミーは、仁川-小松線があるため特に韓国から受講者が多い。国内外の一流講師がそろい、国際コンクール1位も輩出。その一人神尾真由子らがさらに若手を教えるサイクルも生まれている。

指揮者のための真夏の講習会やオーケストラ・アンサンブル金沢の公演ともども混然一体の8月、金沢は国境を越えた才能の切磋琢磨の場だ。松本サイトウキネンをしのご日も近い。

今、欧米のみならず若いオーケストラはどこも面白い。台北、韓国、伸び盛りのベトナム……。南米ベネズエラの国を挙げてのオーケストラ教育では年間予算は65億円。若々しいアプロー

チの演奏には毎回胸がすく。

ただし、若ければ、元気があれば、右肩上がりならばよい、と言えないのが、ヨーロッパで生まれ、世界に伝わったクラシック音楽という大木の複雑さだ。本家でも、忍び寄る老化を、若い血や別の哲学によって補おうという「文化の波打ちぎわ新種発見作戦」をやっている。これからも恐れずにさらに先鋭的に突き進むべき道だと思う。

日本も今こそ、明治からの和魂洋才運動の懐を広げ、欧州と違って一体感のないアジア全体のため、民族文化の上下関係=古い神話の鎖を取り去る時期なのではないだろうか？ 多様性の海に放り投げられても、この列島の文化は今やびくともしないはずだ。相撲の土俵は丸くないといけないのか？

柿田だと絶対面白いと思うが……！
(オーケストラ・アンサンブル金沢)
音楽監督

♪

土俵の形